

多様化する若者たちと 新しい時代を築く

今の若者たちの多様化する価値観に対して、行政や企業はどのように発想を転換していくべきなのか。
新著「恋愛結婚の終焉」を発表した牛窪恵さんと少子化対策や世代間ギャップについて語り合った。

岸本知事(以下岸本) ●私は少子化自体は

開の東京大学の研究を見ても、恋愛意欲

が前提で、頑張ればその先にいいことが

い。そうすると愛する家族が養えない。

ある程度しかたがないと思っています。
というのも、女性が高学歴化し社会的地位

の高さは、正規・非正規という雇用形態

で異なるほか、年収が低い人ほど恋愛を

だから彼らは自発的に集まって「町おこ

にあるからです。日本は結婚しないとい

する意欲も低いという調査結果が出てい

乗っている安心感もありましたが、今の

ことをやるうぜ、町を元気にしようよって

供をつくらないという先進国の中では少

ます。さらに驚いたのは、これまで言わ

れていた男性だけでなく女性についても

と後を追いかけた私たち団塊の下の世代

し変わった国なので、結婚する人が減っ

ていた傾向がみられたという部分です。

岸本 ●私の場合、草の根で選挙運動をし

はさらにその次にくるわけです。しかし

ていることが少子化の原因ではないで

しょうか。結婚しない理由は様々ですが、

触れ合う機会がたくさんありました。一

今、和歌山の若者たちは、自分の仕事も

男女とも所得が低い、あるいは非正規の

雇用形態であるため経済的な面からも結

すが、ともかく家族思いで真面目なん

家族もコミュニティも一緒。あるいは家

婚がしづらい。牛窪さんの新しい著書「恋

愛結婚の終焉(光文社新書)」では、恋愛と

化はできないですが、地元で家業である

ティがある。それは私たちにとってすご

結婚を一緒に考えるから駄目なんだと分

析されていますね。

スーパーマーケットや鉄工所を継いで割

く新鮮なことだし、そんな若者たちが町

牛窪恵(以下牛窪) ●多くの人は当たり前

の責任」という言葉を重くとらえ、飲んで周

中退して家を出している人もいます

ね。 ●今の39歳位より若い世代にとつて

のように、結婚には恋愛が必要だと思っ

りに迷惑をかけたり、次の日の仕事に差

ね。そして何年かして詫びを入れて戻っ

は、まず生活や家族が大切で、地元志向も

ているかもしれませんが、今の若い人た

し障ったりしないよう、責任を負うリス

クを避けていたんです。私たちの青春時

非常に強いという調査結果が出ていま

ちは、結婚が「贅沢品」で、恋愛が「嗜好品

だと考えているようです。2020年公

町に元気がないと商売がうまくいかな

す。イオンが全国に進出し始め、ネット



知事対談

牛窪 恵 × 岸本周平

世代・トレンド評論家
マーケティングライター

和歌山県知事

協力: ザ・プリンスギャラリー 東京紀尾井町

ショッピングもできるようになり、わざわざ都会に行かなくても買物ができる環境が整い、地元志向が強くなったのだという経済学者もいますが、私は、知事が言われるように、家族や自分たちの足元をもっと大事にしようという意識のほうが大きいのではないかと感じます。

岸本 ●和歌山県内にも商店街がありますが、やっぱりシャッター通りになっています。おじさん世代は、これらを何とかしなければならぬという発想で補助金を何年も注ぎ込んできましたが、シャッター通りはどんどん増えています。しかしその若者たちは「周平さん、なぜ商店街を活性化しなくてはならないのですか。僕らが子供の頃からもう閉まってましたよ」と言ってますね。「商店街じゃなくてロードサイドかもしれないけど、自分たちが商売するには十分な商圏があるので、それでいいじゃないですか。昔は良かったというおじさんたちのノスタルジーに付き合う気はサラサラありませんよ」と。また彼らに言われたのは「人口を増やすとか減らさないとか何考えているんですか。日本全体の人口が減る中で和歌山だけキープするってことはよそから取ってまで増やす必要はないですよ」「人口が減ったって、和歌山が好きの人が集まって、わいわいガヤガヤやって楽しけりゃいいじゃないですか」と。教えられ

ることはたくさんありますね。今では「減るのはしょうがない」と私も言えるようになりました。いまさら「産めよ増やせよなんていう時代でもないし、人口は自然に減るので、減った人口で何をするか、という方向に発想を転換していかなきやいけないと思っています。

幸福追求の権利はみんなに平等にある

牛窪 ●一方でLGBTQも重要な課題です。米国ではZ世代(※)の5人に1人が、自分はLGBTQではないかと感じているとの調査結果もあります。日本も前回の衆院選直前に行われた調査では、若者が政治に求めることの第1位が「ジェンダー平等」でした。日本では現状、同性同士だと、結婚に似た生活形式をとっても、子供はどちらかの籍にしか入れません。

※同調査におけるZ世代の定義は1997~2003年生まれ

知事対談

牛窪 恵 × 岸本周平

世代・トレンド評論家 マーケティングライター
和歌山県知事

養子縁組などを含めて制度を見直す時期であろうと思います。

岸本 ●日本には基本的人権の尊重をうたった憲法第13条がありますが、私は憲法で一番大事なのはこの条文で、とても素敵な条文だと思っています。全ての人に「幸福追求の権利」が保障されているんです。そうするとLGBTQの方々にとっても幸福追求の権利が憲法で保障されているので、それに反するならば法律を変えなければ、制度は全て平等にすべきだということになります。和歌山県庁では、私が知事になる前から制度運用上の同性パートナーシップは認められていたが、いわゆるパートナーシップ宣誓制度にはなっていないので、今制度を作ろうとしている最中です。いろんな考え方を持った方にも「幸福を追求する権利はみんなに平等にあるんだ」と説得すればわかっていただけると信じています。

恋愛と結婚は「混ぜるなキケン」

牛窪 ●高度経済成長期やバブル期までは、女性は家庭を守り、働く男性をサポートするとの認識が根ざしていました。ですが、今は共働きが7割で、女性は未来の夫に家事や育児の能力を、男性は未来の妻に経済力を求めるようになりました。今も恋愛では、男性に「力強くエスコートしてほしい」とか、女性に「子供が好きで

料理が趣味です」と言っただけで、イメージしているのにもはや恋愛と結婚で異性に求めるものが180度違うんです。結婚となれば、男性は妻に昭和の男子力のようなものを、女性は夫に昭和の女子力のようなものを求める。恋愛の延長に結婚がないのです。調べると恋愛と結婚、出産を三位一体として考える「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」の概念は、日本ではたつた半世紀程度の歴史しかないことがわかってきました。それどころか脳科学的にも、恋愛と結婚は元来、混ぜるなキケンだそうなのです。

岸本 ●若者が考えている恋愛と結婚のギャップに制度が追いついていないという問題もありますね。以前は和歌山県庁でも婚活事業を行っていたのですが、私が知事になってからやめることにしました。結婚するかしないかは個人の自由な意思なので、公の機関が結婚を勧めることは小さな親切、大きなお世話なんです。我々行政がやるべき仕事は、結婚したい人や結婚した人たちにとって便利な仕組みを作り、子供が生まれてからも働きやすい環境を整備することだと考えています。

等身大の関係を築く

牛窪 ●団塊世代全員が後期高齢者になることで起きるとされる、介護の「2025年問題」に危機感を持っています。団塊世代の親の介護に関わる団塊ジュニアが

今40代後半位ですが、この世代は就職しようという時にバブルがはじけ、就職氷河期が訪れたこともあって、今も結婚せずに親と同居している比率が非常に高いんです。2025年には団塊世代全員が75歳以上になります。このままでは介護や医療の現場での人手不足から、誰がお世話をするんだと社会問題が起きます。これまでは親にご飯を作ってもらい、家賃代わりに月数万円を家に入れば許され、経済効率がいいと感じる独身者も多かったのですが、これから一人で親を介護しなければならなくなると、仕事との両立が難しくなる。私は結婚という制度は、お互



牛窪 恵

世代・トレンド評論家 マーケティングライター
立教大学大学院ビジネスデザイン研究科客員教授 修士(MBA/経営管理学)
東京生まれ。1991年日本大学芸術学部卒業後、大手出版社入社。2001年マーケティングを中心に行うインフィニティ設立。トレンド・マーケティング関連の著書で「おひとりさま」「草食系」を世に広めたほか、テレビのコメントーターとしても活躍。和歌山未来創造プラットフォーム・アドバイザーボードメンバー。

いに支え合えるパートナーを得る意味でも、非常に有効だと思っています。逆に、結婚に恋愛力が必要ないのだから、恋愛が特技だと胸を張る人より、恋愛が苦手でも信頼できるパートナーの存在を探そうが理に適っているのではと考えます。

岸本 ●私もそうなんです。年配の人間には、今、現実にかけている現象や若い人たちの気持ちがわからないことがあります。おじさんやおばさん世代が作った古い制度を改めて、ギャップを早く解消する以外に解決策はないですね。

牛窪 ●バブル世代は今50代から60代前半になっていますが、特にこの世代までの男性は恥ずかしいところを見せたくない方が多いので、「部下に信頼を得たいのだが」と悩むケースが増えています。私が研修などでお伝えするのは、「わからないことは恥ずかしながら、若い世代に聞いてください」ということです。今若い人たちも、自己肯定感が低い傾向があるので、上司から「教えてくれる?」と聞かれると、部下は役に立てたとむしろ喜んでくれる可能性が高い。そういうことを積み重ねていくことで、お互いに等身大の関係を築くことができるのではないのでしょうか。

対談の動画を「YouTube和歌山県公式チャンネル」で配信中
<https://www.youtube.com/@PrefWakayama>

